冬の花

小林守城

いまさら生き急ぐこともあるまい。
古希過ぎてなお畏れること
老いた感性はとがらせて
交りあうために出てゆくことだ。
冬の街頭に咲く花だってある。

久しぶりに見たよ
民主主義
若いシールズやママの会
いのちのつらなりへ
一人ひとりの言葉で

＊　＊　＊

どこかにあったはずの家
どこへ行くこともないはずの家
おれたちが仲睦まじく永眠している家
おれたちのほかに誰が住んでもいい家
いつか帰ってきて
いつでも旅に出て行ける
おれたちの家はないか。
これから
里海や里山のあたりに
これから

＊　＊　＊

いまさらなんだ
腐れ縁などと！捨て台詞を
無造作にだしたではないか

いまさらなんだでもあるまい。
当事者はもういない
どこかの軌道でほっかぶりしていても
許すも許さないもない。
ちょっとした冗談に深く傷ついた

世代の時は過ぎてしまった。
ただ　時計はいまも
おのれのアイデンティテーに
生きているということを
遙かな天の絆よ！
深く理解してくれただけで
おれはあらたに生きのびられる。

＊　＊　＊

やり場のない怒りはどこへゆく。
人・社会・自然の不条理
そして　難民
私たちの祈りや詩に向かう
生きものたちの声を他者に伝える
やさしい天与の心性はどこへいった。

物や数が否応なくものをいう力学
科学技術や資本に賭けてきた
物神の無法地帯
二十一世紀の初頭いまなお
自死や自爆テロへと向かう
自生のやり場のない怒りを
解消する術も生かす術をもたない。

＊　＊　＊

小異を捨てることはない
曖昧に捨ててはならない
だが予感の内にでも行動せよ
先ずは大同に着くことだ。
その先に開ける踊り場に出たら
地平の見晴らしも良くなれば
小異を包摂する関係ができ
克服されるのではないか。

やり場のない力を　民主主義を

「ただの人」の尊厳を
分断された力を集約せよ
政治の新たな出直しのため
なんどでも

＊　＊　＊

いのちてんでんこ
それはぎりぎりの指針だ
言葉にならないいのちの断末の
避けられぬたいせつなきずなの
ぜんめつをかいひするための
それぞれのいのちの哲理

いのちてんでんこ
この知恵は天与のものだ
いきものの地下茎をつらねる
ひとつの木であり花でもある
希望のことばを捨てぬ人間の
不条理には対抗する人間の
無声の言語

＊　＊　＊

これらは詩歌とはいえないだろう。
自分でもそう思うのだ
生きている限りそう思うだろう
詠うことをためらう意識が
雑音のような背後の声が聞こえる。
たぶん
正直な素性が後ろにのさばり
雑音に耳を傾ける他者を
拒んでははじまらないことを
どこかで
身につけてしまったからだ。

＊　＊　＊

破壊された街並み
難民の群れ行く道
シリアかパレスチナか
それともフクシマか
家の前に立て札が見える
Too Late to be Free and Peace!
だが
No, too Late to be
Free and Peace´Even now
と叫んでいる声がする

夢の中で降ってきた言葉を
たどたどしくつないでいく
追いつめられた詩人
異邦人のようなおのれに向って
今からでもやり直すしかないと
夢中で叫んでいる声がする

＊　＊　＊